

豊庄だより

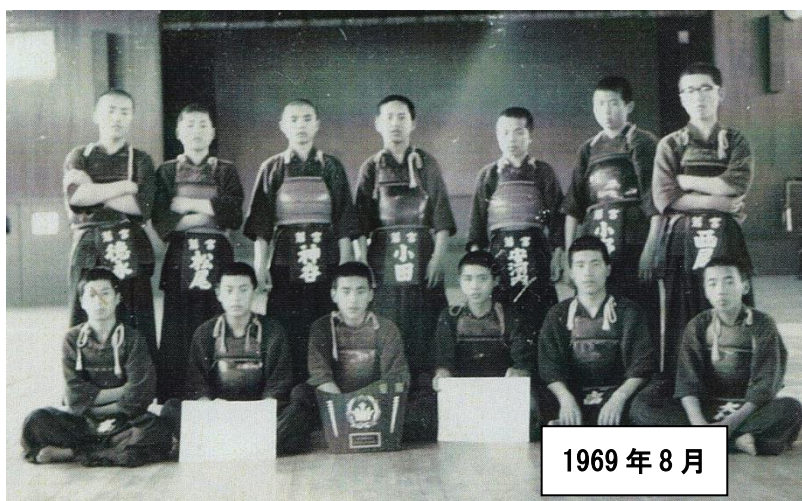


第 708 号 2022 年 5 月 16 日

前号で「部活は地域で指導すべき」というスポーツ庁有識者会議の提言案に対し、ちょっと複雑な思いを持ったことを 2 人の剣道部員との関わりを紹介しながら書きました。今号はその続き（部活問題）です。

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

私は、教員時代、生活のかなりの時間を部活動に使ったことは事実です。しかし、部活動は教育活動であり、勝利至上主義には反対ですし、部活動の目的が選手養成になってはいけないと肝に銘じてきました。こんな思いを持つようになったのは私の中学時代の体験（剣道部顧問の先生との出会い）と大きな関係があります。時間を私が中学校に入学した半世紀ほど前に戻します。私が通っていた中学校は町に一つしかなく、家から 5 キロくらいあり、（ちょっとカッコつけた言い方になりますが）部活には入らず勉強に専念していました。しかし、夏休み中、家の農作業の手伝いをする以外、だらだらとした生活を続け、このままでいいのかと考えるようになりました。夏休みが終わり、「よし、何かやってみよう」と思うようになり、剣道部に入ることを決めました。なぜ剣道部を選んだかは、今となってははっきりと思い出せませんが、W 中剣道部は柔道部と並び部員が多いだけでなく、活動も活発だったからでしょう。2 学期になって入部した

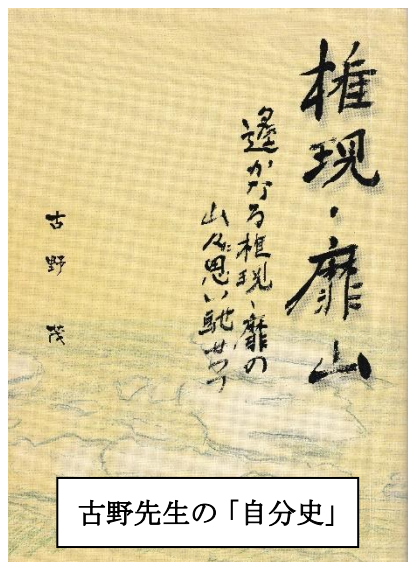


1969 年 8 月

ものの、すでに友だちは防具をつけ先輩たちと練習をしていました。力の差は歴然でした。試合をするようになってほとんど勝てません。そんな時のことでした。顧問の古野茂先生が、「西尾君、試合に勝つことがすべてではない。とにかく練習を休まず続けなさい」と声をかけてくださいました。以来、「下手でもいい、とにかく休まずがんばろう！」と決め、3 年間頑張りました。剣道部の練習は、夏休みも盆以外休みがなく、また、この期間は帰省している先輩たちが中学校の練習によく来られ、かなりきつい練習をしてきました。先生もほとんど休まず練習に参加され、夏休みの練習最終日には、皆勤をした部員に努力賞として竹刀をくださったりもしました。努力しているものには、試合の勝ち負けに関係なく、評価してくださいました。

上の写真は、中学生最後の中体連の大会の後、3 年生全員で撮ったものです。剣道の選手は 5 人、補欠が 2 人。私の学年の部員は 13 人いましたので、半分は大会に出場できません。私は出場できない組のメンバーでした。私が中学校の教員になり、剣道部の顧問を長く続けましたが、毎年多くの部員がいて、誰を選手にするかいつも迷いました。でも最終的には選ばねばならず、選手になれなかった生徒のことを思うたびに古野先生から言われた言葉を思い出しました。

今回、剣道部のことを書くにあたり、以前古野先生の息子さんからいただいていた先生の「自分史」をじっくりと読み返しました。先生が教員になってから剣道を始められたこと（なんと 31 歳になってから）、在校生だけでなく卒業生とのつながりも大事にされたことを知りました。そして何より印象に残ったのは、「剣道の達人を作ろうとは思わない。竹刀を通じて子どもたちと喜びや苦しみを一緒に味わいたい」という言葉でした。部活を地域に任せ、教員の負担を軽減することは大事です。しかし、子どもと教師が日常の教育活動の中で喜びや苦しみをどれだけ一緒に味わっているかを、まず省察しなければと思いました。



古野先生の「自分史」